

< 小学生・中学生・高校生の意見発表 >

みっ君とひか君に教えてもらったこと

蒲郡北部小学校 6年 西田 ひなた

ひなたさんは、やさしくて思いやりがあり、困っている子にさりげなく手を貸すことができます。また、縦割り班で行っているなかよし掃除で、1年生から5年生をまとめ、大変頼りにされています。

みなさんは、友達を大切にしていますか。私は、大切にしています。いっしょに遊んだり勉強をしたりすると、楽しいからです。

私のクラスには、障がいのある友達が2人います。ちょっと、苦手なことや、困ってしまうことが多いけれど、2人は、みんなにはできないことができます。みっ君は、音楽の授業のとき、だれよりも楽しんで歌っています。音楽が大好きで、家でも音楽番組を見て、歌っているそうです。ひか君は、色ぬりがすごく上手です。ひか君のかく魚の絵は、とてもあざやかで、今にも泳ぎ出しそうです。このように、2人のすごいところは、それぞれ違います。

2人は、苦手なことや、困ってしまうこともあります。そういうときは、クラスのだれかが気づいて、助けてあげます。でも、助けてあげてばかりでは、いけないと気づきました。なぜなら、みっ君やひか君のためにならないからです。みっ君やひか君ができることは、させてあげたいと思いました。例えば、机を運ぶのは、どこに運ぶかを教えてあげれば運べます。他にも少しの手助けで、こんなこともできたんだとびっくりすることもたくさんあります。授業の感想も、その1つです。2人とも5年生のときは、書く言葉をだれかが教えてあげないと、感想が書けません

でした。でも、6年生になったら、自分で考えて、感想を書けることが増えました。できなかったことができるようになっていたので、すごいと思いました。

また、私は、「お知らせ係」で、集会があるときに、ひか君を、3組の教室から6年2組に連れて来る係です。この前、ひか君をむかえに行くのがおそくなってしまいました。あわててむかえに行くと、ひか君はもう3組の教室には、いませんでした。先生に、「ひか君は、どこにいますか。」

と聞くと、「ひか君は、集会のことを知っていて、1人で6の2に行つたよ。」

と、教えてくれました。私は、1人で行けたなんて、すごいと思いました。

みっ君やひか君のすごいところは、まだまだあります。みっ君は、あいさつをだれよりも先に、にこにこで、大きな声でします。それに、新幹線のことをよく知っています。ひか君のすごいところは、自転車に乗れるように努力しているところと、夜、いつもマラソン大会に向けて走っているところです。

そんな2人に、私が教えてもらっているよ



うな気がします。それは、「あきらめない」ということと、「努力」です。私は、バスケットの練習が辛いと、すぐにやめてしまいます。でも、そんなときは、みっ君とひか君

のことを思い出します。みっ君とひか君に教えてもらった、「あきらめない」と「努力」をこれからも続けていきたいと思います。

魔法

蒲郡東部小学校 6年 横田 亜伽音

亜伽音さんは、やさしく、何事にも力いっぱい頑張ります。部活動はソフト部で、ピッチャーとしてチームのみんなと力を合わせて練習しました。球技指導会ではその努力が実り、みごと優勝をかちとりました。今日は亜伽音さんの日頃の思いを発表していただきます。

私は、6年生になってからあいさつをするようになりました。それは、クラスみんなが、あいさつをしていたからです。

毎日、私が学校に来て教室へ行くと必ずと言っていいほど

「亜伽音ちゃん。おはよう。」

と言ってくれる友達があります。私は、おはようと言ってくれたら返事を返します。

私からあいさつをしようと思ったけど、先に言われてしまい、まあいいかと思っていました。

ある日、あまりしゃべらない友達が、私に「おはよう。」

とあいさつをしてきてくれました。私も負けてはいけないと思い、明日は、絶対に言うぞと思いました。

そして、教室に入って、私は、

「おはよう。」

と言いました。そしたら、その友達も私に笑顔で、

「おはよう。」

と言ってくれました。私は、先にあいさつをしてよかったと思いました。こんなにあいさつが気持ちがよくて、笑顔になれるんだと実

感しました。

他の子にも、あいさつを自分から、少しずつしています。だけど全員には言えてないので、言えるようにしたいです。

ところで、私の通学路には病院があります。近くで、車いすの人に声をかけられました。

「おかえり。」

と言われました。私は、うれしかったけど、返す言葉がなく軽くおじぎをして帰りました。私のしたことはこれでよかったのかな。少しまよいました。何日か経って今度は、帰り道にリハビリをやっている人が、

「こんにちは。」

と言ってくれました。私はまよいなく

「こんにちは。」

と言いました。この前のときのように、まよいはありませんでした。

7月に指導会がありました。私はソフト部のピッチャーでした。ストライクを入れなきゃと苦しかったけど、みんなが、「ピッチャー、落ち



着いて。」

「ピッチャー、入るよ。」

と声をかけてくれました。私は少し楽になって、いつものようにピッチングをして、みんなで優勝することが出来ました。

私にとって、思いやりのあるあいさつや声かけはみんなが気持ちよくなるし、自分も

気持ちよくなる、とてもとてもすてきな魔法だと思います。

私は、大きくなって大人になっても、もっと年をとっておばあさんになっても、思いやりのあるあいさつや声かけを、続けたいし、たくさんみんながしてほしいと思います。

二つの笑顔

塩津中学校 3年 天野 千寿

天野さんは、生活ボランティア部で活動してきました。日頃から、校内の美化活動、地域の福祉施設訪問など、人のためになる活動を精力的に行ってきました。夏休み中の池の大掃除では、水着になって鯉をつかむなど、元気いっぱいの姿を見せました。天野さんの優しい心配りは塩津中の学校生活にうるおいを与えてくれます。

「すみません！！」

と私に向かって知らない男の人が突然声をかけてきました。

ある土曜日、部活に遅れそうだった私は急いで学校に向かっていました。すると私の目



の前に白い杖を左右に振って歩く男の人がいました。私はすぐにその人が目が不自由なことに気づきました。そこでじゃまにならないよう、横を走り過ぎようと思いました。そのとき急にその男の人に声をか

けられて、私はびっくりし、その場に固まってしまいました。男の人は、

「実は私、ここに来たばかりで道がわからなくて、Aショップにいきたいんですけど。」

と話すので焦りました。この人の場合にまっ

すぐ行けば着くなんて教えて、そこに着くかどうかなんてわかりません。一緒についていくのがいいと思うけどそのときは本当に遅刻しそうだったので思わず、

「こ、この道をまっすぐ行けば着きます。ご、5分くらいで！！」と、あやふやなことを言っていました。すると男の人は、「分かった。5分ですね。しっかり数えていきます。ありがとうございます。」と言うと軽くおじぎまでして歩いていきました。

私は無事に着けることを祈りながら走って学校に行きました。何日か過ぎ、その人のことは忘れかけていたときでした。いつもどおり学校に向かっていると、目の前にいつかの男の人がいました。私は文句でも言いに来たのかと思うとちょっと怖くなって、そっと進んでいきました。でも、

「あっこの前、道を教えてくれた人ですね。」と、その男の人に言われたので、またびっく

りして「は、はい」とへっぴり腰になってしまいました。なぜ私だと分かったのか不思議でした。

「本当にありがとう、5分歩いたらAショップだったんです。本当にありがとう。」

私は、「い、いえ。」と応えました。私は前から不思議に感じていたので、思い切って、「あなたは目が見えないのに、なぜそんなに明るいですか。」

と聞いてみました。男の人は、

「最初はヘコんだけど、そのかわり、耳が異常に発達したし、私より不運な目にあっている人を考えたら大分ラッキーだと思うんで

す。だから性格ぐらい明るくしたいと思ったんです。」そう言うとその男の人は歩いて行きました。私は反省しました。人に親切にしてあげることで「私は偉い」と思っていました。人に尋ねられて応えるなんて当たり前なのに、自分自身と戦ってるあのの方がよっぽど偉いと思います。自分が情けなくなりません。私はこれから人に言われたらやるのではなく、困ってる人が目の前にいたら自分から行動しようと思います。自分にとっては小さなことでもその人にとってはとても役に立つこともあるから。

きっとそこには二つの笑顔ができるから。

支えあって、住みやすく

三谷中学校 3年 池田 佳穂

池田さんは、責任感が強くリーダーシップがあり、前期広報委員長・後期副級長として、学校や学級を引っ張る存在としてがんばっています。水泳部では400m自由形で東三大会5位に入賞し、女子総合優勝に貢献しました。

「今からおばあちゃんのところに行ってくる。何かあったみたい。」

それだけ言って母は出ていった。夜になって帰ってきた母から、こう聞かされた。

「おばあちゃん、心臓が少し苦しくなって、病院に行ったんだって。今まで風邪もひかないくらい元気だったから、少しショックを受けているみたい。今度、顔を見に行こう。」

豊明市に住んでいる祖母は、もう80歳を超えているというのに、最近まで卓球や編み物などを習っていた。そんな祖母が病気になったなんて、全く信じられなかった。

次の休み、私たちは祖母のもとに出かけた。祖母の家に向かう途中、母にこう言われた。

「おばあちゃん、体も心配なんだけど、ちょっと物忘れがひどくて、同じことを何度も聞いたり、言ったりするかもしれないけど、嫌な顔しちゃだめだよ。」

家に着くと祖母は元気そうで、前に会ったときと変わりはなく、私たちの訪問をすごく喜んでくれた。しかし、母が言ったことがどういう意味なのか、すぐに分かった。

祖母の好きなケーキをお土産に出すと、

「おいしそうなケーキだね。お土産に持ってきてくれたの。うれしいねえ。」

5分もたたないうちに何度もお礼を言ったり、



「おばあちゃん、こんなに薬を飲まないとい
けないんよ。もう長生きできないのかね
え。」

と言うのだ。父も母もその度に、「大丈夫だ
よ。」と笑いながら答えていた。私と姉は、
そんな母たちの何気ない様子に戸惑って、ど
うしたらいいのか分からなくなった。

家に帰って、その気持ちを素直にぶつけた。
「おばあちゃん、認知症になっちゃった
の？」

すると母は、優しくこう言った。

「おばあちゃんは、病気のせいで弱気になっ
ているだけだよ。でも、もう歳だから優し
くしてあげてね。笑って話を聞いてあげる
だけでいいから。実はお母さん、自分のお
じいちゃんのこと、今でも後悔している
んだ。」

母は若いとき、自宅で認知症になった祖父
を介護していたそうだ。昔は今のよう介護

施設はないから、それが当たり前だったらし
い。それでも、昼も夜もなく歩き回ったり、
所構わず排泄したりする祖父に家族中が振
り回され、大好きだった祖父に大きな声で怒
ったり嫌々面倒を見ていたことを30年も
たった今でも後悔しているというのだ。

幸い祖母の症状は落ち着き、物忘れもおさ
まってきた。それどころか、その後しばらく
して祖父が体調を崩したとき、びっくりする
くらい元気にお世話をしていた。

今回のことで、私はたくさんのことを学ん
だ。日本は世界でも類を見ない高齢社会だ。
今回のことは私の家だけの問題ではない。坂
の多いこの町は高齢者には住みにくいのか
もしれない。だからこそ若い私たちがすすん
で地域の方々とふれ合い、支えていくことが
できたらと思う。周囲との関わりの薄れたこ
の時代、この町から活気を取り戻していきたい。

私を支えてくれる人へ

大塚中学校 3年 尾崎 葵

葵さんは、前期生徒会執行部に入り、よりよい学校づくりを目指して率先して活動しまし
た。ハンドボール部では、2年生の頃からゴールキーパーとして、チームを支えました。何
事にも全力で取り組む頑張り屋さんです。

あなたは、今、誰かに支えられて生活して
いますか。中には、自分一人の力で生きてい
ると思っている人もいるかもしれません。私
は、本当に多くの人に支えてもらっていると
感じています。

まず、家族に支えられていることは言うま
でもありません。食事を作ったり、洗濯をし
てくれたりする祖母。祖母がいないと、何も
できないくらい頼ってしまっています。いつ

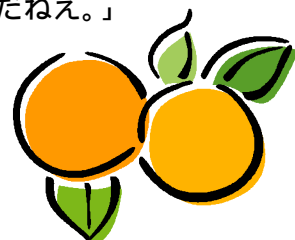
も優しく相談にのってくれる母。誰にも言え
ない相談ができるたった一人の存在です。

支えてくれているのは、家族だけではあり
ません。近所に、畑仕事をしているおじちゃ
ん、おばちゃんがあります。

「今年は大きく育っただねえ。」

「ちょっとすっぱいか
もしれんけど。」

「たくさんできたで、



もらって。」

なんて言いながら、私の家の玄関にみかんやかきなどといった果物や旬の野菜を置いていってくれます。時々、私に

「大きくなったねえ、何年生だん。」

「もう中学生かあ、早いねえ。」

と声をかけてくれます。私の成長を小さい頃からずっと見守ってくれているんだなと思いました。

普段何気なく通っている通学路には、私たちの安全を守ってくれるおじちゃんがいま。毎月ゼロのつく日には、朝早くから横断歩道のところに立って、笑顔で挨拶をしてくれます。邪魔な草を刈ったり、毎日ゴミ捨て場がきれいであるように掃除してくれたりするの、地域のおじちゃん、おばちゃんです。自分の仕事と決められているわけではないのに、自分から進んで地域のために働いてくれるおじちゃん、おばちゃんを私は尊敬しています。

このように、私を支え、優しく見守ってくれている人がたくさんいるから、今の私がい

るのだと思います。

「元気に大きくなって、笑顔でいてくれたら、それが一番。」

と、よく祖母が私に言ってくれます。家族だけでなく、地域のおじちゃん、おばちゃんも私たちが元気であることを願ってくれているのだと思います。だから、自分を支えてくれる人に元気であることを伝えることは、恩返しの一つになると思います。風邪をひかず健康でいること、学校生活を頑張ること、挨拶をすること、元気の伝え方は様々ですが、何より笑顔でいることが一番なのではないかと思います。

今、私のようなご近所づきあいをしている人は少なくなってきていると思います。お年寄りが増えてくるこれから、地域の方たちとの絆を深め、助け合っていく必要があります。私は、これからも自分を支えてくださる方たちへの感謝の気持ちを忘れず、私も地域の人に役立ち、支えられる人になりたいです。

ゴミのゆくえ

西浦中学校 3年 小田 実有紀

実有紀さんは真面目な性格で、授業や行事に全力に取り組むことができます。バスケット部では東三大会出場に貢献しました。前期生徒会会計として、あいさつ運動やエコキャップ運動、体育大会の企画や運営など、みんなのために働くことができました。

また捨ててある、私はそう思いながらも何もなかったかのような顔をしてそのゴミを通りすぎました。たびたびお菓子やペットボトル、缶コーヒーなどのゴミが私の家の近くに捨ててあります。だけど、捨てた人が悪い

んだし、誰かが拾って捨ててくれるだろうと思っていたから全然気にしていませんでした。

それから数日後、学校の帰りにふと下を見ると、あのとき落ちていたゴミはもう落ちて

いませんでした。私の代わりに拾ってくれた人は嫌な思いをしたらろな、私は拾っとけばよかったなと後悔しました。

でも、その後はゴミが落ちているところを見なくなりました。ある日の日曜日、父が「今日はゴミの日だったな。ゴミを出しに行くか。」

と言いました。私は父と一緒にゴミを出しに行きました。私の家では漁港まで出しに行きます。そこにはたくさんのゴミがありました。だけど、地域のステーションには出してはいけない物も置いてありました。私はルールを守れない人がいることを悲しく思いました。

家に帰ってそのことを母に話したら、「お母さんの家の地区は、もっと分別の仕方が厳しかったよ。」

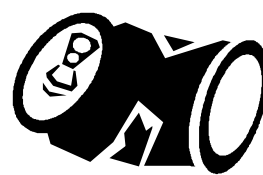
と言いました。私はどのような分別をしてだせばいいのかが知りたくて家にある『ごみの出し方便利帳』という冊子を見ました。そこには、ゴミの分別が細かく書かれていました。例えば、プラスチック製容器の汚れが取れないものは可燃ゴミに出す。30cm 以内のものしか出せないなど知らなかったことがたくさんありました。

今の時代、たくさんの物であふれています。

次々と新しい物が出てくるので、古い物はどんどん捨ててしまいます。私は、ゴミを見て物を大切に長く使えなくなるまで使っていくと思いました。また、その後の分別も大切だと思います。分別するとリサイクルされてもう一度物として使え、CO₂を減らすことにもつながるので、とても地球に優しいからです。

私はあれからまた缶コーヒーが家の近くに落ちているのを見ました。今度は迷わず缶コーヒーを拾いました。べたべたしていて気持ち悪かったけど、私の気持ちは晴れ晴れとしました。

私が今回のことを通して一番印象に残っていることは「ゴミの出し方便利帳」の表紙に書かれていた『混ぜればゴミ、分ければ資源』という言葉です。分け方によってゴミにも資源にもなるなら、多くのゴミを資源に変えたいです。普段の生活を見直せば、ゴミはいくらでも減らせます。私はこれからもゴミへの意識を高めていきたいと思います。



必ずできるはず

蒲郡中学校 3年 壁谷 織衣

織衣さんは、何事にも前向きに取り組む真面目な生徒です。弓道部部长として、常に部員を励まし、真剣に活動をしていました。誰にも優しく親切な織衣さんは、友達も多く、みんなから好かれています。

「服装を正しなさい」

「掃除をきちんとしなさい」

「人任せにせず、自分から動きなさい」

入学して、ずっと言われ続けてきた言葉です。

私たちの学年は「しっかりした学年」とは言えないと思います。もちろん注意されなく

てもできている人もいます。しかし、全体としてみると、やはり少ないように思います。

こう書くと、あたかも自分がしっかりとできているように思われますが、そんなことはありません。例えば、配布するものがあつたら「配るべきかな」と思う一方で、「どうせだれかが配るだろう」と思ったり、「いい子ぶってるよね」といった声が聞こえてきたりしそうで、躊躇してしまいます。

もちろん、そんなことは一度もありませんでしたが、結局は、「配らなくてもいいんじゃないか」という思いに負けてしてしまいます。

こんなことを書いてしまうと悪いイメージも持たれてしまうかもしれませんが、そんなことはありません。ここぞという場面では、みんなの力を合わせて団結できます。生徒会や学級役員も行事の中心となって自主的に取り組んでくれています。そんな姿を見ると、

「すごいな、やる気があるんだなあ」と、自分ができないことをできる仲間を尊敬しています。そんな仲間もいて、実際に

「蒲中生、最近動きがいいね。」
「あいさつがしっかりできているね。」
という言葉が、先生や地域の方からももらえるようになってきています。

だから、今のこの現状がとても悔しいです。

やろうと思えばできるのに、「周りの目が気になる」とか「みんながやっているから」と周りに流されてしまい、この現状から抜け出せないことに。本当はもっとできると心の中でしっかりと自分の考えを持っている人がたくさんいるのに、心の奥にしまってしまい、諦めてしまっているこの現状に。

「力があるのだから、やればできる。」
この言葉も何度も先生から言われました。このまま、その力を出せずに終わってしまうのはもったいないと思います。

3年生になって、体育大会や修学旅行を成功させることができたのは、やはり一人一人が協力しようと、気持ちを一つにする瞬間があつたからこそだと思います。そんな仲間たちだからこそ、もっと成長した、新しい伝統を作ることができる「蒲中3年生」になれるのではないかと、本気で思います。

蒲中生でいられるのも、この仲間たちと過ごせるのも、あと半年です。笑っても、泣いても、あと半分しかありません。半年後、蒲中生でよかった、この仲間たちと充実した3年間を送ることができてよかったと、笑って卒業したいです。

私たちには、「力がある」のだから、必ずできるはずです。



父の背中を見て

形原中学校 3年 三浦 峻

三浦君はいつも明るくほがらかな生徒です。テニス部では、毎日の練習に熱心に取り組み、努力を惜しみませんでした。また選挙管理委員長として、地道な作業、責任感ある行動は、だれからも信頼されています。

「もうそんなことするなよ。」あのときの父は、そう言いながら僕を抱きしめてくれました。

僕が小学校1年生のとき、ほしかったゲームを買うのに小遣いが足りず、家に置いてあったお金を少しもらってしまいました。父はそのことを知ったとき、今までに見たことのない厳しい顔つきになりました。僕はそのとき初めて悪いことをしてしまったということに気付きました。

そのときの僕は、いろんなことが頭の中を巡り、訳がわからず抱きしめてくれた父にしがみついておもいきり泣きました。

それから何年も経ち、僕はそんな出来事があったことをすっかり忘れてしまっていました。

僕が中学3年生になったある日。いつまでも宿題を後回しにしてダラダラしている僕に、父はこう言いました。

「早く宿題をやりなさい。今できないことが後になってできるわけがないだろう。」

そう言われた僕はその言葉に素直に従うことができませんでした。正直心の中では「うるさいなあ。わかっているよ、そんなこと。」と腹を立ててしまいました。嫌々ながらも机に向かっていましたが、宿題が一段落したところでふと先ほどの父の言葉を思い出して「なぜ父はそう言ったのか。」と考え始めました。

いつだって父は意味もなく、僕を叱って

る訳ではなく、なにか思いがあって言っているはずだ、僕はそう考えました。

後日母に尋ねてみると、

「峻にはやるべきことはすぐにやれる、立派な大人になってほしい。」

とお父さんは言っていたそうです。やはり父は僕のことを考えてくれていたのです。

ふと思い返してみると、小1のあのときも父は僕のことを本気で考え、叱ってくれていました。抱きしめてくれたときの父の顔は、全て受け入れてくれていた表情でした。時がたち、すっかり忘れてしまっていたけれど、父は僕が悪いことを繰り返さないようにとしてくれていたのです。

僕はこれまで言葉の表面だけで自分にとってうるさいお説教を言われていると感じてしまい、反発してしまいました。でも、それは父の言葉の奥にある僕への愛情に気付いていなかったからです。しかしその愛情に気付いた僕は、父への感謝の気持ちでいっぱいになりました。

いつも僕のことを考え、僕の将来を気にかけてくれる父の存在はとても大きいと思います。しかし僕は「感謝の言葉」をあまり伝えていませんでした。だからこれからは、「ありがとう」と父に素直に伝えていきたいです。

そしていつか、自分が大人になったとき、



父のように自分の子供の成長を心から願えるようになりたいと、心から思います。

助け合いながら生きること

中部中学校 3年 渡邊 莉友

莉友さんは、テニス部のキャプテンとして、部をまとめながら活動してきました。学習も熱心に取り組み、現在英語スピーチコンテストの代表として特訓しています。文武両道の莉友さんを、たくさんの仲間が慕っています。

わたしの家には、近所の人たちが来てくれることがけっこうあります。家の近くの畑でとれた野菜を

「もしほしかったら、勝手にとっていてもいいよ。」

と言ってくれる人。いちご狩りに行って、とってきたいちごを分けてくれる人。どこかに旅行に行ったとあって、おみやげを持ってきてくれる人。夜ごはんに作ったおかずなどの残りを持ってきてくれることもあります。わたしが家にいるときによくこのような近所の人たちと母との会話を聞きます。また、わたしが学校などから、家に帰ってくると、母がお菓子などを持って、

「これ、さんからいただいたから、食べてもいいよ。」

ということもよくあります。だから、わたしが家にいないときでも近所の人たちがよく家に来てくれるのだなと思いました。お菓子が食べれたり、おみやげがもらえたりするのはとてもうれしいです。でも、そんなにたくさん家におすそ分けしに来てくれるのは、どうしてなのだろうと思いました。

その数ヵ月後、わたしは家族と一緒に旅行に行きました。そこのおみやげ屋さんに行って、おみやげをみていました。ほしいおみやげが決まったので、母のところへ行きました。

そうすると、母はいくつかのお菓子の前に立って、悩んでいる様子でした。自分たちの家の分のお菓子はもうかごの中に入っていたので、何をまだ悩んでいるのだろうと思い、母にきいてみました。すると、

「さんのおみやげにどのお菓子がいいのか迷っているの。」

とかえってきました。

そのときに、いつも近所の人たちが家に来て、おすそ分

けをしてくれる理由が分かりました。いつもお互いにおみやげなどをあげたり、もらったりするなかで、近所の仲が深まるのです。そして、何かあったりしたら助け合ったりできるその関係が素晴らしく思えました。

わたしは、この体験を通じて、近所の人々と助け合う大切さを知りました。よく、今は昔ほど近所付き合いがよくないと聞きます。でも、わたしはこんなに素敵なものがなくなってしまうのはもったいないと思います。だから、自分が大人になっても、近所の人たちを大切にしていきたいと思っています。



平和のために私たちができること

蒲郡東高等学校 2年 甲斐 誉人

甲斐君は三谷中学校出身の現在2年生。テニス部で活躍するスポーツマンです。現在は生徒会の副会長として、責任感を持って会長を補佐し、学校行事の成功に貢献しました。冷静沈着に物事を判断できる、探究心旺盛な人物です。

今現在、「日本は平和ですか？」と問われたとき、多くの人が「平和です。」と答えると思います。日本が平和であると答える理由は日本での犯罪発生率が他の先進国と比べ圧倒的に少なく、それが示すように治安がとてもいいことや、情報の伝達やメディアが発達しインターネットや携帯電話で全国のいろいろな人と繋がることができたり、テレビをつければたくさんの番組が放送されています。よい環境とすばらしい技術に恵まれた日本はまさに平和だと言っても過言ではありません。

そんな中で僕は今ある平和について考えさせられる出来事がありました。それは5月に修学旅行で沖縄を訪れたことです。そこで目にしたものは基地問題という大きな壁でした。沖縄のいろいろな場所に基地があり、実際に耳にした戦闘機の音は騒音というよ



りもむしろ爆音と言った方が正しいと思うほど大きな音でした。そして何より辛いことは日本にある基地のほとんどが沖縄に集中していることです。沖縄に基地が集中しているということはもし戦争が起こったときに、まっ先に狙われるのは沖縄です。第二次世界大戦で辛く悲しい思いをし、基地撤廃が一番に願う沖縄の方々には基地があるせいで常に危険と隣合わせで生活している

のです。とても寂しい現実です。このような事実を知り、「本当に毎日が平和なのか」、「本当に日本は平和なのか」、そういう思いが込み上げてきました。今まで多くの人たちが考えていた平和というのは、いかに表面的であったかを思い知らされた瞬間でした。

平和とは人間が追い求める最大のテーマであると思います。平和という言葉を辞書で調べてみると戦争のないことや平穏であることなどが載っていました。しかし僕はそれだけが平和だとは思いません。僕が考える平和とは人間が人間らしく生活することができるのが本当の平和だと思います。今生きている多くの人々は大きな悩みを抱えたり辛い思いをしています。中には、追いこまれて自殺までしてしまう人さえいます。人間が人間らしく生活できていない、それを偽って自分に嘘をついていて、それが平和と言えるのでしょうか。僕たちがこれからすべきことはただ全ての戦争を終わらせることではありません。人々が共に生きている意味を分かち合えば人間が人間らしく生活できると思います。僕たちは今一度平和について考えなければならぬときが近づいていると思います。平和を考え直すのは勇気のいることです。しかし僕は思います。「平和とは願うものではなく叶えるものだ。」そういう思いを胸にして生活していきたいです。

支えあうこと

蒲郡高等学校 3年 鈴木 里奈

鈴木さんは、人一倍の努力家で、部活動と学業の両立を果たしました。自分の考えを明確に持ち、常に集団の中での自分の役割を自覚し、誠実にやり遂げようと努力することができます。好奇心旺盛で、何事にも納得がいくまで追い求めるので、日商簿記検定2級などのハイレベルな資格を取得することができました。

私が高校生活で得たものは、大きく3つあります。どんなこともあきらめず挑戦する勇気・目標に向かって努力し続ける心・そして、私を支えてくれる大切な人たちです。この3つを私ができることができたきっかけは、資格取得と部活動でした。

私は9種類の資格を持っています。これらは今でこそ私の自信になっていますが、初めは重荷でした。資格取得のための学校の授業もとても苦手で、特に簿記の授業は聞いているだけで精一杯でした。そんな中、担任の先生に日商簿記検定2級を受けてみないかと提案されました。この検定は、高校生だけでなく一般の人も受ける資格で合格率は約30%です。落ちるのが目に見えているのに受けるなんて絶対に嫌だと思っていました。しかし、検定を受けると言っていた友達が、もし受けるのなら一緒に勉強をしないかと誘ってくれました。その日から、私の日商簿記検定2級合格への勉強が集中的に始まりました。友達とほぼ毎日朝の7時半頃登校し、先生にプリントをもらい勉強しました。試験日が近づくにつれ勉強時間も増え、1日に5時間以上勉強に充てることもありました。自分でも驚くほど集中力は続き、とにかく必死でした。しかし検定当日、私はスッキリとした気持ちで朝を迎えることができました。絶対に合格するという目標に向かい、努力してきたことが自信になっていたからです。合

格発表の日、一緒に勉強をしてきた友達と番号を見ました。結果はなんと、全員合格。受験に向かって背中を押してくれたり、サポートしてくれた先生や友達の存在、私は感謝の気持ちでいっぱいでした。その気持ちは、合格したという喜びをさらに大きくするものでした。

もう1つが部活動です。私は杉山先生の御指導のもと、女子バスケットボール部員として充実した日々

を過ごしました。私たちの部活動は人数も少なく、いわゆる弱小チームでした。週5日以上 of 厳しい練習をこなして

も、勝つことができませんでした。練習試合を終える度話し合いをしました。他学年とぶつかりあうこともあれば、試合を振り返り全員で大泣きしたこともありました。困難を乗り越える度に絆はより深くなり、全員がチームを支える、なくてはならない存在となりました。先生はこのチームのことを、常に笑うと書いて常笑チームと言います。私たちは、どんなときも、笑いが絶えません。このチームには愛があります。多くの先生方に支えられてきました。そして、あきらめず挑戦する勇気と高い目標に向かい努力する力があり



ます。私たちは、チームの仲間のことを「杉山 fam」と呼びます。泣いた顔も怒った顔も見せてきた、心から信頼できる私のもう1つの家族です。私は、バスケの技術以外に大切なことを部活で学びました。高校生活を、こんなにも充実させてくれた「杉山 fam」は私の誇りです。

私は、高校生だからこそできる経験を多くしました。資格取得や、部活動を通じて挑戦する勇気や努力の大切さを知りました。そして共通してわかったことがあります。それは、私を支えてくれているたくさんの人たちの存在や、その大きさです。一人ではできなくても、人と支えあうことでできるようになることがたくさんあるはずです。私は高校生活

で支えられる喜びを知りました。辛く逃げ出したいこともありました。けれど周りの人たちの支えのおかげで、逃げずにやり遂げることができた、今の私があります。最近では、私と同じ高校生がおこした悲しいニュースをよく耳にします。もし私も独りぼっちだったら同じことをしていたかもしれせん。でも、私には“一生懸命になれるもの”と“支えてくれる仲間”がいました。誰でもそんなかけがえのない存在が近くにあれば、前向きに充実した生活をおくることができるのではないかと思います。だから私は、たくさんの方々が自分にしてくれたように誰かを支え、常に笑顔にできるそんな人間になりたいと思っています。

在来生物が減ってきている原因について考える

三谷水産高等学校 3年 松田 健也

松田君は魚の増殖について興味があり、海洋資源科栽培漁業コースに入学しました。栽培コースでは、水産生物や栽培漁業について学び、蒲郡市内の河川で採取した鮎を用いて人工種苗の生産・放流を行っています。また、現在水産系専門学校進学に向け、日々学習に励んでいます。

皆さんはなぜ日本の在来生物が減ってきているのか考えたことはありますか。おそらく皆さんの多くは外来種が在来種の生態系を脅かしていると考えているのではないのでしょうか。

外来生物とは元々日本にいなかった生物で、人間の手によって日本に持ち込まれた生物のことです。今では普通に見られるアメリカザリガニやミドリガメ、ライギョなどがそれに該当します。

確かに、1つは外来生物による食害があり、琵琶湖でのブラックバスによる食害は広く

知られています。これは、漁業を営んでいる漁業者の生活を脅かすとして、問題視されたからです。琵琶湖ではなぜ、外来魚の中でもとりわけブラックバスによる食害が問題視されるようになったかということ、それはブラックバスの生態にあります。環境適応能力が極めて高く、攻撃的で動きが素早い。小魚から昆虫まで動く小動物なら何でも食べる。一年で成熟し、産卵後オスは巣に留まり、卵や稚魚を守るため次世代



への生存率が高い。そのため淡水生態系の最上位に位置するとされているからです。もう一つは、外来生物と在来生物との交雑です。あまり知られてはいませんが、タナゴを例にとると、在来生物である日本固有種のニッポンバラタナゴと、形質が似ており外来種である中国や朝鮮半島原産のタイリクバラタナゴが交雑して生まれた雑種がどんどん増えており、純粋なニッポンバラタナゴは、調査においてもなかなか見つけることができません。

このような状況になってしまったら、人間の手で在来種を保護管理していかなければなりません。

このように、外来魚は食害や交雑により在来魚の減少に大きな影響を与えているのは確かですが、果たして在来魚が減っていく原因が全て外来魚にあるのかというと、そうではありません。確かに外来魚は食害していま

すが、それだけで在来魚が急激に減ったとは考えられません。では、それ以外の原因は、いったい何だと思いませんか。

それは私たちが生活を豊かにするために引き起こしている環境破壊なのです。身近な例で言えば家庭排水などによる水質汚濁や、護岸工事や埋め立てによる水草地帯消失による自然浄化作用の減少、産卵繁殖場所の減少です。これらが相乗効果となり在来魚の減少に拍車をかけているのです。最近では、様々な環境保全の努力がなされていますが、一度人間の手によって崩されてしまったバランスは放っておいても時間や自然が解決してくれるようなものではありません。

外来生物を持ち込んだり、環境を自分の都合に合わせて開発し、在来生物を絶滅の危機に陥れているのは私たち人間なのです。

